2022年3月6日（日）

宣教 「イエスの姿が変わる」

聖書：マルコによる福音書9章2節～13節

みなさん、おはようございます。

教会の暦では今年先週3月2日（水）からレントに入りました。レントは四旬節とも受難節ともいわれます。復活の希望を持ちつつ、イエス・キリストの十字架に至る苦難の姿を覚える期間です。復活日（イースター）の前の6回の日曜を除いた40日間とされています。この暦の起源は2世紀ごろだといわれます。ちなみにイエスさまの復活日イースターは、「春分を過ぎて最初に訪れる満月の、直後の日曜日」と定められ、今年イースターが4月17日です。今年のレントは3月2日から4月16日までです。この時期、主の復活の希望を持ちつつ、十字架の道を歩まれた主イエスの苦難の中に示された神さまの恵みと愛を共に味わいつつ、自らの言葉や行動を見つめ直しながら過ごしたいと願っています。

今日の聖書箇所には、イエスの姿が山の上で変わったことが記されています。

◆イエスの姿が変わる

2:六日の後、イエスは、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、
高い山に登られた。イエスの姿が彼らの目の前で変わり、

3:服は真っ白に輝き、この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白
くなった。

イエスは受難の予告をされて、六日の後、12人の弟子の中から、ただペトロ、ヤコブ、ヨハネだけを連れて、高い山に登られました。この3人はイエスが大切な時によく同席しています。あのゲッセマネの祈りの時にも、この3人をイエスは連れて行きました。弟子たちのリーダーでもあったようです。

そして高い山は、ガリラヤ地方のずっと北にあるヘルモン山と言われてい
ます。この山は万年雪をいただいているようです。ちなみに伝説ではイエスが登
った山は、ガリラヤ湖の西にあるタボル山ではないかとの説もあります。

ただこの高い山に登るということは、旧約聖書の指導者

モーセがイスラエルの多くの民をエジプトから神の約束された乳と蜜の流れる地、カナン
の地に導くための40年に亘る旅の中で、神を礼拝するためにシナイ山に登ったことを連想させ
ます。モーセはそこで神を礼拝し、神の言葉を聞き、10の戒め、十戒を受けたのです。

イエスとペトロ、ヤコブ、ヨハネもこのヘルモン山の上で、天と地をお造りになった神さまの言葉を聞くのです。その意味で、今日の聖書箇所は、マルコ福音書の頂点でもあるようです。イエスさまは、この山を降って一気に受難への道に進まれます。

山の上で「イエスの姿が彼らの目の前で変わり、3:この世のどんなさらし職人の腕も及ばぬほど白くなった。」この場面は「山上の変容」と言われます。イエスの姿が変わったのです。「服は真っ白に輝き、」とあります。白は勝利をまた神の栄光を表します。輝く、勝利の印です。

教会に通い出して礼拝につながり、聖書を読んで、また教会の人々との交わりの中で、共に祈り賛美する中で、自分の心の中でイエスが特別な存在になる時があります。その時は、イエスは自分にとって白く輝く時でもあるのではないだろうかと思います。イエスさまに見つめられた感じになり、愛されていることを覚え、愛したい、ついて行きたいと心に思うのです。このイエスと共に生涯を生きていきたと思えるようになって行くのです。その時、人は気付かなくてもイエスに出会っているのだと思います。

さて、山の上では、その時、

4:エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。

エリヤは旧約聖書に出て来る預言者あり、救い主キリストがこの世に来られる前に再び現れると人々に信じられていました。モーセは先ほどお伝えしましたイスラエルの指導者モーセです。エリヤは旧約聖書の預言をモーセは律法を表していると言われます。昔、トルコを訪問して古代のユダヤ教の礼拝所、シナゴグの遺跡を訪ねた時、シナゴグの中でモーセ像とエリヤの像の破壊された跡を見たことがあります。それほどユダヤ教徒にとっては重要な人物だったので。またこの二人に共通しているのは、彼らは神のしもべであり、その生涯をかけて神を信頼して生き、その生涯は苦難に満ちていたということです。同族の民からも批判されることがあったのです。しかし、苦難の中でも神が共におられることを信じて生きた人たちでした。

4:エリヤがモーセと共に現れて、イエスと語り合っていた。この光景を見た弟子のペトロは気を動転してしまいます。

そして、

5:ペトロが口をはさんでイエスに言った。「先生、わたしたちがここにいるのは、すばらしいことです。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、もう一つはエリヤのためです。」 気の早いペトロらしいこと

ばと振る舞いです。

ペトロは、どう言えばよいのか、分からなかった。弟子たちは非常に恐れていたのであると言われていました。

「仮小屋」とは、イスラエルの天幕を思わせます。ペトロは、着ていた服を脱いで日よけを作ろうとしたのかもしれませんが。

その時、天からの声が聞こえたのです。まさに神の声でした。

7:すると、雲が現れて彼らを覆い、雲の中から声がした。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」と。

ここが中心です。雲とは、聖書では神さまが共にいてくださることを表します。神の臨在といわれます。ですからわたしたちも雲を見る度に、神さまを思うことができるのです。その点、淡路島は環境に恵まれています。

神さまの愛と厳しさを自然からの学べるのです。

「これはわたしの愛する子。これに聞け。」この言葉は、マルコ 1 章 11 節(p61)、詩篇 2 章 7 節 (p835) など聖書のいろんな個所にあります。

キリスト者として私たち、教会は、旧約聖書を尊重しながらも、神の子イエスをすでに与えられていることを感謝します。「これはわたしの愛する子。これに聞け。」もうこれからは、ただイエスに聞いて生きればよいのです。助けてもらうために、高いお金を払って祭りごとやまじないを行う必要はなくなったのです。

ただただ、神の子イエスに聞きながら人生を生きていけば良いのだということです。イエスの復活された後、イエスの弟子たちの時代になって、主イエスを中心とする交わりである、神の民エクレシアとしての教会がペンテコステの日にも生まれたのです。その交わりの中にわたしたちも入れられているのです。

「8:弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスだけが彼らと一緒におられた。」この言葉が、象徴的だと思えます。

ただイエスだけが、イエスだけは共にいてくださったのです。神の子イエスとイエスの救いと教え、神を愛し人を愛すること、祈ること、主にある交わりが信仰者とキリスト教会の基本です。イエスの前では、伝統も、数の多さも、組織の大きさも建物もあっても良いけれど、第一ではないのです。それらは、あっても良いのですが、それが第一になると本末転倒になるのです。

偶像礼拝のようになって行くのです。歴史の中で地上の教会も組織として道を誤ることもありましたし、常に誤りを犯す危険性はあるのです。イエスに立ち帰ることが大切なのです。

8:弟子たちは急いで辺りを見回したが、もはやだれも見えず、ただイエスが彼らと一緒にいられた。

わたしたちもやがて地上の生活を終わる日は誰でも来ます。

「ただイエスが彼らと一緒にいられた。」ということ覚えておきたいのです。詩編 23 編 4 節のことばを思い出します。「死の陰の谷に行く時もわたしは災いを恐れない。あなたがわたしと共にいてくださる。」と。またガリラヤ湖で小舟に乗った弟子たちが、逆風のため波に悩まされていた弟子たちに、夜が明けると、イエスは湖の上を歩いて弟子たち近づきます。弟子たちは幽霊だと言って、おびえ、恐怖のあまり叫び声をあげました。その時、イエスは彼らに「安心なさい。わたしだ。恐れることはない。」と話しかけられました。イエスが舟に乗り込むと風は静まったのです。

本日読みました山上での出来事の後、イエスと弟子たちはふもとに降りました。

9:一同が山を下りるとき、イエスは、「人の子が死者の中から復活するまでは、今見たことをだれにも話してはいけない」と弟子たちに命じられた。

イエスはエルサレムで十字架の待つ受難の道に向かわれます。

弟子たちは、そのことの意味を本当は分かりませんでした。

自分たちが、これからどうなるのかで精いっぱいだったのです。

わたしたちも、似たり寄ったりではないでしょうか。

順調に見える時には、喜び、神に信頼し、感謝のできますが、少し不調になると途端に、不安と恐れと、神さまへの不信感が募ってくるのです。

でも、神さまとイエスさまは、弟子たちやわたしたち弱さをすべて存知なのです。罪を赦してくださるのです。そのために十字架の苦難を担ってくださったのです。

ですから、ただただ神さまとイエスさまにすがって生きて行けば良いのです。何があっても地上に平和を願い求めつつ、為すべき事を成して主と共に生きて行きたいと願います。主は共にいてくださいます！

苦難を生きるウクライナの人々の上に主の守りと助けを祈ります。

主の平安を祈ります。